

評価から評定への総括について

江戸川区立平井東小学校

◎評価から評定への総括

【観点別学習状況の評価】

学習指導要領に示す各教科の目標に照らして学習の実現状況を分析的に評価し、各教科の評定を行う際に、基本的な要素とする。

【評定】

学習指導要領に示す各教科の目標に照らして学習の実現状況を総括的に評価する。

学習の過程における評価情報



単元（題材）における観点別学習状況の観点ごとの総括



学期末における観点別学習状況の観点ごとの総括



学年末における観点別学習状況の観点ごとの総括



学期末の評定への総括



学年末の評定への総括

◎評価について

○子どもを伸ばす評価

学習の結果だけでなく学習の過程を重視した評価

- ・友達との比較ではなく、子ども一人一人が持っている良さや可能性などを多面的に行う評価
- ・子どもが自らの学習を振り返り、新たなめあてをもつことができるような評価

○評価の種類

・自己評価

子ども自身が学習を振り返り、自分の良さに気づき、課題を把握し、新たなめあてを設定できるようにする。

・相互評価

子ども同士が互いの良さを認め合うようにする。

・教師による評価

教師が子ども一人一人の良さを適切に評価し、課題や習熟度を把握する。

○評価方法

・ペーパーテスト

テストや学力調査などで、学習の習熟度を把握する。評価の基本とする。

「90点以上」 → 「A」

「60点以上90点未満」 → 「B」

「60点未満」 → 「C」

・提出物

ノート、ワークシート、作品、観察記録、レポート等の内容や提出状況を調査する。

- 観察

活動時に表す態度や発言などを観察し、記録する。

- 面接

子どもと相対して話し、話し方や表情から内面も理解する。

- 質問紙

質問内容を決めておき、子どもの意識や実態を調査する。

ペーパーテストでは、子ども一人一人の単元別、観点別の習熟度を客観的に把握するには、有効な手段である。しかし、評価はペーパーテストだけで行うのではなく、提出物や観察、面接や質問紙等、多面的に子どもの評価を行う。また、子ども自身の自己評価や、子ども同士の相互評価を取り入れることにより、より確実に評価を行い、それらを全て総合的に判断する。

◎単元（題材）末・学期末・学年末における観点ごとの評価の総括

単元（題材）において、具体的な学習活動に即して設定したいいくつかの「学習活動における具体的評価規準」ごとに評価を行い、観点ごとにそれらの評価結果を総括する。

「A・A・A」 → 「A」

「B・B・B」 → 「B」

「C・C・C」 → 「C」

A・Bが同数になったり、A・B・Cが混在したりするものについては、評価の結果の状況を数値によって表せるようにし、この数値から総括を行う。Aを3、Bを2、Cを1とし、下記の平均値を基準とする。

「2.5以上」 → 「A」

「1.5以上2.5未満」 → 「B」

「1.5未満」 → 「C」

◎観点別学習状況の評価の評定への総括

観点別学習状況の評価の評定への総括においては、3観点の重点の置き方に関わらず、3観点の評価（左から「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」）を下記のように総括する。

「A・A・A」 → 「3」

「B・B・B」 → 「2」

「C・C・C」 → 「1」

A・Bが同数になったり、A・B・Cが混在したりするものについては、評価の結果の状況を数値によって表せるようにし、この数値から総括を行う。Aを3、Bを2、Cを1とし、基本的に下記の合計値を基準とする。

「8以上」 → 「A」

「4以上8未満」 → 「B」

「4未満」 → 「C」

教科や学年において、評定に総括する際の観点別学習状況の評価結果について観点ごとの重みが異なることがあることや、同じ「A」「B」「C」という評価結果についても、それぞれの評価結果が示す

実現状況には幅があることなどを十分考慮し、評価から評定への総括を行う。

本校では、上記の評価を経て、最終的に下記の基準で判断し、評価を行い、評価から評定への総括とする。

評価	「十分満足できる」	→	「A」
	「おおむね満足できる」	→	「B」
	「努力を要する」	→	「C」
評定	「十分満足できる」	→	「3」
	「おおむね満足できる」	→	「2」
	「努力を要する」	→	「1」